

修士論文(要旨)

2016年1月

地域クリニックを利用する高齢生活習慣病患者の低栄養に関連する要因

指導 渡辺 修一郎 教授

老年学研究科

老年学専攻

214 J 6003

葛 輝子

Master's Thesis
January 2016

Low Nutrition-Related Factors Affecting Elderly Lifestyle Disease Patients
in a Community Clinic

Teruko Katsura
214J6003

Master's program in Gerontology Graduate School of Gerontology
J•F Oberlin University

Thesis Supervisor : Shuichiro Watanabe

目次

I. はじめに	
1 研究背景	1
II. 研究の意義と目的	
2-1 研究意義	1
2-2 研究目的	1
III. 研究の対象と方法	
3-1 調査対象者	1
3-2 調査方法	1
3-3 分析方法	1
3-4 倫理的配慮	1
IV. 研究結果	
4-1 横断的研究結果	2
4-2 縦断的研究結果	2
V. 考察	2
引用文献	

I. はじめに

1. 研究背景

今日、主要死因を占める生活習慣病への国民の関心は高く、2014年厚生労働省委託調査の結果、健康にとって最もリスクとなるものとして「生活習慣病を引き起こす生活習慣」をあげた人の割合は41.9%にのぼっている¹⁾。現在、わが国の健康長寿社会の実現に向けた施策としては、「メタボリックシンドローム」にとくに着目した生活習慣病対策を推進しており、死因の約6割を占める「がん」や「心・血管病」の生活習慣病の予防として、過剰な塩分・脂肪分を控えることを推奨している¹⁾。しかし、中年期の健康増進には有効性のあるこの施策は、高齢者にとってどのような意味があるのだろうか。特に後期高齢者にとっては過栄養よりもむしろ、低栄養のほうが生命予後に与える影響は大きい²⁾。一般に見られる低栄養の主な原因は、疾病や障害ではなく普段の栄養摂取にある³⁾とされているがその認知度は低い。

II. 研究の意義と目的

2-1 研究意義

先行研究では、低栄養に及ぼす要因として日常生活自立度や食品摂取の多様性との関連、食習慣や食行動に関連するもの、健康状態と体力に関連する研究が多い。本研究では、高齢者が、生活習慣病の基礎疾患の管理のために食生活を変容している事により、フードファディズム「健康や病気に対する栄養の影響を過大に信じること」⁴⁾に繋がり、PEMに陥るのではないかと考え、生活習慣病患者と低栄養に関連する要因を探ることにした。

2-2 研究目的

地域クリニックを利用する高齢生活習慣病の低栄養に関連する要因を明らかにする。

III. 研究の対象と方法

3-1 調査対象者

横浜市栄区Kクリニックの外来に通院する、生活習慣病患者65歳以上の88名(女性46名、男性42名)を対象とした。

3-2 調査内容

対象の基礎疾患管理状況、受診時の血液生化学データ、調査票による面接調査の二種類を行った。項目は、患者のBody Mass Index(BMI)、血清アルブミン値(A1b)、総コレステロール値、中性脂肪、HDLコレステロール、ヘモグロビンである。面接調査では、老研式活動能力指標の一部である手段的自立尺度の調査、介護予防チェックリスト¹³⁾、フードファディズムに関する項目を調査した。

3-3 分析方法

外来受診者の面接調査を行った時期である(直近)の血液生化学データを用いて栄養状態の分布および低栄養の関連要因を明らかにした。直近のA1bと、前回の外来受診時である(前回)のA1bを用いて栄養状態の変化に関連する要因を検討した。栄養状態の指数として(A1b)>4.0g/dLを「正常群」とし、(A1b)≤4.0g/dLを「低栄養群」とする2群にわけ変数間の関連を分析した。A1bの変化量を測定するために、個々の受診日の受診間隔が平均約3か月だったため、A1b90日当たりの変化量として補正した。

3-4 倫理的配慮

本研究は、桜美林大学研究倫理委員会の承認を得て実施した(承認番号:15019)。

IV. 研究結果

4-1 横断的研究結果

1. 高齢生活習慣病患者の低栄養の頻度は19%~29%、後期高齢者では40%であった。
2. 直近の栄養状態は、「夕食調理者」との有意な関連がみられ、家族が夕食を作る群で低栄養群が多かった。
3. 直近の栄養状態と「健康情報の活用度」との間に有意な関連がみられ、健康情報の活用度が高いほど栄養状態が高い傾向がみられた。

4-2 縦断的研究結果

1. 90日当たりのAlb変化量は「健康情報の活用度」と有意な関連がみられ、健康情報の活用度が低いほど90日当たりのAlbの低下の度合いが大きくなる傾向が認められた。
2. 90日当たりのAlb変化量は「高血圧症有」群では小さかったが、「高血圧症以外の通院者」である栄養性疾患(脂質異常症、糖尿病、高尿酸血症)群では、90日当たりのAlb低下量が大きかった。

V. 考察

本研究では、地域クリニックを利用する高齢生活習慣病患者のPEMに関する要因について考察する。横断的結果では、低栄養群の発生頻度は、19%~29%となった。「低栄養群」を、前期高齢者と後期高齢者の区分で比較すると、後期高齢者の低栄養群が40%と高い頻度となった。この結果を先行研究で報告されているPEMの発生頻度と比較すると「病院通院患者」では10%程度、「在宅診療を受けている高齢者」では32%~35%程度の報告が多く、先行研究の報告の頻度と同程度ではあったが、本研究においては操作的に低栄養と定義したAlbの水準が4.0g/dLのため低栄養を過大評価している可能性もある。フードファディズムと「低栄養群」との関連をみると有意ではなかった。今後、フードファディズムの要因として、心理社会的な側面の考慮・検討の必要性がある²⁴⁾。対象者の疾病管理上の行動・態度の実態では、健康雑誌やマスメディアから得た情報を活用している「健康情報の活用度」(活用または時々活用、参考程度、活用しない)が栄養状態と有意に関連し、とくに健康情報を活用または時々活用することがAlb値からみた栄養状態を大きく改善させるうえで有効であることが示唆された。縦断的結果では、Alb90日当たり変化量に対し、健康情報の活用度において「活用または時々活用」「参考程度」「活用しない」の順にAlbの低下量が大きくなる傾向が認められた。このことから、健康情報を活用している人は、情報リテラシーが高く、健康情報を主体的に選び活用する力がPEMを防ぐ要因となり得るのではないかと考えられた。また、Alb90日当たり変化量は「高血圧症有」群では変化量が小さく、「高血圧症以外の通院者」である栄養性疾患(脂質異常症、糖尿病、高尿酸血症)は、Alb90日当たり低下量が大きく、PEMに陥りやすいのではないかと考えられた。

引用文献

- 1) 厚生労働省：平成 26 年版 厚生労働白書，2015
- 2) 葛谷雅文：高齢者の低栄養．老年歯学，20 (2)：119-123，2005
- 3) 新開省二：高齢者の低栄養の現状とその予防．日本医事新報，No.4615:71-77，2012
- 4) 高橋久仁子：健康情報娯楽テレビ番組に起因したフードファディズム．群馬大学教育学部紀要 芸術、技術、体育、生活科学編，43：175-183，2008
- 5) 厚生労働省老健局：平成 25 年 地域包括ケアシステムについて．2013
- 6) 桜井孝：高齢期における生活習慣病と老年症候群の考え方．公益財団法人長寿科学振興財団，高齢期における生活習慣 Advances in Aging and Health Research 2012, 177-190，2012
- 7) 横手幸一郎：高齢者におけるメタボリックシンドローム (1) 脂質異常症の意義．公益財団法人長寿科学振興財団，高齢期における生活習慣 Advances in Aging and Health Research 2012, 35-42，2012
- 8) 葛谷雅文：要介護高齢者における栄養管理．老年医学 updt2007-08：34-64，2007
- 9) 厚生労働省：平成 24 年度介護予防マニュアル改訂版 資料 4-2，2012
- 10) 権珍嬉，鈴木隆雄，金憲経，吉田秀世，他：地域在宅高齢者における低栄養と健康状態および体力との関連．体力科学，54：99-106，2005
- 11) 柴田博：高齢者の食生活を考える視座．老年医学 48 (7)：885-888，2010
- 12) 野川ともえ：「地域ケアの概念と構造」日本地域福祉学会編『新版地域福祉辞典』中央法規，184，2006
- 13) 新開省二，渡辺直樹，吉田裕人 他：『介護予防チェックリスト』の虚弱指標としての妥当性の検証．日本公衆衛生雑誌，60 (5)：262-274，2013
- 14) 渡辺修一郎：高齢者の生活機能と食．老年医学 48 (7)：889-894，2010
- 15) 渡辺修一郎，熊谷修，柴田博：地域高齢者の栄養改善の介入試験．日本老年医学会雑誌，47 (5)：422-425，2010
- 16) 大荷満生：高齢者の栄養評価．静脈経腸栄養，22 (4)，439-445，2007
- 17) 大塚礼：高齢期における生活習慣病の予防 (1) 食生活・食習慣．国立長寿医療研究センター
- 18) 東口みずか，中谷直樹，大森芳，他：低栄養と介護保険認定・死亡リスクに関するコホート研究 鶴ヶ谷プロジェクト．日本公衆衛生雑誌，55 (7)：433-439，2008
- 19) 葛谷雅文：高齢者低栄養の評価とその対策．日本老年医学会雑誌，47：430-432，2010
- 20) 宮原洋八：地域高齢者の生活機能とヘルスアセスメントとの関連．ヘルスプロモーション理学療法研究，1 (1)：29-32，2011
- 21) 柴喜崇，渡辺修一郎：地域在住高齢者における加齢に伴う生活機能の変化および予防の考え方．理学療法学，41 (5)：320-327，2014
- 22) 熊谷修，渡辺修一郎，柴田博，他：地域在宅高齢者における食品摂取の多様性と高次生活機能低下の関連．日本公衆衛生雑誌，50 (12)：1117-1124，2003
- 23) 渡辺修一郎：2015 年問題から 2025 年問題へ 特集健康長寿を支えるこれからの栄養イノベーション．臨床栄養，126 (1)：18-23，2015
- 24) 富田拓郎，上里一郎：食物選択と食物の嗜好，食物摂取の態度・信念・動機，接触抑制との関連性について：実証的展望．健康心理学研究，11 (2)，86-103，1998